

東洞祭について

聖光園 細野診療所広島診療所
山崎 正寿

吉益東洞についてはこの「和漢薬」誌でも過去に特集されており、よくご存知のことであろう。江戸中期に京都で古方漢方を中心にした日本漢方の礎を築いた偉傑である。

吉益家はもともと紀州浅野家が、安芸広島に国替えになった時に、広島に移ってきたので、ずっと広島の人達ではない。吉益東洞の生地は現在の広島市山口町(現在の銀山町[かなやまちょう]付近)にある。父は畠山道庵という医者であった。母も四国・伊予の人である。38歳の時に一家で京都に移り苦労を重ねながら、典医山脇東洋の支援を受け、次第に名医として名をなした。晩年には一度故郷の安芸に帰省しているが、墓所も京都東山の臨濟宗東福寺にあり、京都に骨を埋めたのである。

広島では郷土の偉大なる医人として、古くは大正12年(1923年)に没後150年忌(1773年没)を、広島出身の呉秀三、富士川游らが顕彰記念会として開いている。そして、東洞没後200年の1973(昭和48)年には、広島県医師会が顕彰委員会を立ち上げ、ブロンズ座像を作製し、全国から集められた遺墨および画像を展示し、広島県医師会館に展示・陳列して、郷土の偉傑を顕彰したのであった。

その翌年(昭和49年7月)、広島の漢方家の医師・薬剤師達で成り立っている広島漢方研究会(故小川新先生会長)が、全国の漢方家の賛同を得て、吉益東洞ゆかりの広島市寺町の報専坊に顕彰碑を建立した。顕彰墓碑は故大塚敬節先生の揮毫によるものであった。以来毎年9月、広島漢方研究会有志によって、報専坊にて仏式の回忌が続けられていたが、故あって顕彰碑を移転しなければならなくなり、故小川先生を始めとして大変苦慮した末、当時の広島大学医学部出身の広島大学学長であった原田康夫先生、医史学の江川義雄先生などのご尽力を得て、広島大学医学部創立50周年記念行事の一つとして、1995(平成7)年9月10日に広島大学医学部基礎棟前に吉益東洞顕彰碑が移転建立された。新しい顕彰碑建立に当っては全国から発起人寄付が寄せられた。

吉益東洞の顕彰碑が廣大医学部内に決まって以来、毎年9月の第2日曜日に、東洞の顕彰会が開催されるようになった。末裔に当たられる吉益暢夫氏(東京在住の医師)も時々参加され、医史学会広島支部と合同で、故伊藤清夫先生や多留淳文先生などをお招きして講演会も開かれてきた。

昨年(平成16年)、故小川新先生が病床に臥せられてから、小生ら(広島漢方研究会)が主体となって、医史学会とは別れて東洞顕彰会を開くことになった。昨年の第10回顕彰会は急遽独自に開催することになったため、小生(山崎)と当地のベ

テラン薬剤師の鈴木氏とで講演をおこなった。今年の第 11 回東洞顕彰会は、改めて出直そうという意味で、富山医科薬科大学副学長から千葉大学大学院教授に移られた、寺澤捷年先生の『吉益東洞「建殊録」に登場する越中の僧達』という講演をしていただいた。また、広島大学薬用植物園助教授の神田博史先生は、『吉益東洞先生が使った薬草』という題で講演していただいた。

このように吉益東洞の顕彰は先輩達の努力のもとに続けられてきた。これを中断するわけには到底出来ないし、やはり吉益東洞の「医の心」に今日も触れつづけていかなければならない。東洞先生の医学は古医方といわれるが、若い時の勉強は、素問、靈枢、難経、諸病源候論、千金方などに及び、幅広い古典の学問の上に築かれた古医方であると言える。つまり深い背景と思想が東洞先生の医学には在るのであり、後世の我々はそれを汲み取っていかねばならない。